

## 野崎有以

### ネオン

そのボクシングジムから最初の世界王者が誕生した日

冬の寒い土曜日の夕方

西武電車の池袋駅 天井のシャンデリヤ プラットホームのネルドリツプコーヒ

ーの香り

メキシコで新しい世界王者が誕生したことを知らせる号外が羽のように舞った

椎名町へ向かう電車のなか

見知らぬ乗客同士がボクシングジムのネオンを指さして談笑する

夕日とネオンの下にはガラス越しにボクサーたちをのぞく大勢の人々

「いつもの風景のなかに世界王者になる青年がいたとはねえ。いやあ、あっぱれ」

「しかし、相手もすごいな。立派な紳士ですね」

号外には敗れた王者が新王者の手を高く掲げて勝利を称えた様子が伝えられていた

日本の青年に敗れたのは「メキシコの赤い鷹」と呼ばれたボクサーだ

メキシコシティのスラム街から這い上がった伝説的な英雄だった

「二回目の左ストレートを決められたとき、相手が強すぎると思った」

赤い鷹は日本から来た青年をしきりに称えた

赤い鷹が敗れた試合に対して暴動が起きるかとも思われたが

観客もまた新しい世界王者に敬意を表した

あるものは自分の子供のミドルネームにその青年の名前をつけた

赤い鷹は12ラウンドで棄権し 新王者のTKO勝ちだった

メキシコの赤い鷹は彼の人生においてもまた最終ラウンドまで到達することはな

かった

ああ メキシコの赤い鷹よ

とても悲しいことに年老いたあなたの姿を誰も知らない

しかし あなたは人々の心のなかで永遠に生き続ける

ボクシングジムの壁には最初の世界王者の肖像画が飾られた

そのボクシングジムから最初の世界王者が誕生した日

私はまだ生まれていなかった

いまはもういない椎名町のおばさんから聞いた話だ

椎名町のおばさんの家に行く途中

買ったばかりの本をボクシングジムの前で読んで夕焼けを待っていた

ボクシングジムのネオンに重なった夕日がこれ以上ないくらいきれいなんだ

どこかうれしい涙で滲んだような眩しさ

まるで夕暮れにたたくむチャンピオンのように誇らしげだった

私の名前は長崎の有明海に由来する

この辺は長崎という地名だから

夕焼けの時だけ長崎がみえるような気がしていた

誇らしい夕日のなかで生まれたことを私は信じていた

背の高いお兄さんが階段に座って洗濯したてのこんがらがったバンデージをほどこいていた

「これがちゃんと巻けると、ケガをしないでたたかうことができるんだよ」

「それじゃあ、芸者のお姉さんたちが白粉の下に塗る髻付け油と一緒にだね。ムラなく塗れて一人前。芸者のお姉さんたちはお座敷遊びでいつも勝つでしょう。私もそれ巻きたい」

お兄さんは一瞬目を丸くして笑いながら私に手を出すように言った

夕日とネオンのなかでバンデージが巻かれていく

守られていると安堵した夏の初めの夕暮れ

お兄さんの自転車のうしろに乗ってマリー写真館の前まで送ってもらった

「東京の長崎 安いアパート 風呂がない トイレは共同 時折大家が

大鍋抱えて 戸を叩く 飯を食べると…」

お兄さんが自転車を漕ぎながら歌うのを聞いて 私と同じような人間なのだと思います

った

「この町は夢を持って上京した若い人がたくさん。でも、もう帰ろうと思うんだ」  
地面に近づく夕日がいつそう眩しくなった

ボクサーは詩人で 詩人はボクサーだ

リングを去っても 詩が書けなくなっても たたかいつづける運命なのだ

私は自分の過去とかあるいはもつとこわいものとたたかっている

お兄さんは何とたたかっていたのだろう

お兄さんが巻いてくれたバンデージは

たぶんいまも私の手に巻いてある

だから私は詩人になった

ああ 一行書くたびにいまも心が擦り減る思いがするよ

過去に引き戻されるおそろしさを

誰かわかってくれる人はいるか

心から流れる血を止めることのできない絶望を

誰かわかってくれる人はいるか

詩を書くことは誰かの苦しみを引き受けることでもあることを

わかってくれる人はどこかにいるか

心が傷だらけになっても立ち上がって詩を書きつづけるんだ

やっと やっと やっと手に入れたペンを手放すことなんかできない

ペンを握るたびに歓声が聞こえる気がするよ

ダウンをとられてたまるかっていつも思ってる

私は決してノックアウトされない

いつかの私のように立ち上がれない子供たちがたくさんいるから

そういう子供たちを残してノックアウトされるわけにはいかない

ボクシングジムが閉鎖された日

椎名町へ向かって走る電車のなかからネオンがひっそりと消えるのを見た

ネオンが消えたことに気づいた人は誰もいなかった

ネオンと夕日がもう重ならないように

あのお兄さんには会えないのだろう

そのうち小綺麗なマンションなんか建って

そこがボクシングジムだったことなんかみんな忘れてしまうよ

世界王者が五人も出たことだってみんな忘れてしまうよ

さよならボクシングジム！

さよならお兄さん！

更地に降り注ぐ夕日はボクシングジムがもうないことに気づかない

知らないほうが幸せなこともある

夕日は今晚もネオンを探している

『現代詩手帖』二〇一八年八月号より

メキシコの情熱

メキシコ

ああメキシコ

メキシコね！

メキシコか？

メキシコだ

大森の珈琲亭ルアンには「メキシコの情熱」という飲み物がある

オレンジの差さったグラス グラスの底には粗くて白い砂糖

「メキシコの情熱」を注文すると店主が電気を消し

店内の客からは冒頭のような歓声やため息が漏れる

読書に没頭していた客には迷惑だろうが

退屈そうに外を見ていた客には清涼剤だろう

やがてその暗闇のなかで店主が火のついたテキーラを運ぶ

テキーラはグラスのなかで青い炎を上げる

火の消えないうちに熱いコーヒーが注がれると一瞬だけ赤い炎が見える

それは翼を大きく広げた赤い鷹のようでもある

赤い鷹は消える直前 最も美しい赤い色をする

そして炎はコーヒーに溶けて消える

赤い鷹などもとからいなかったかのよう

店主は再び電気を点け

何事もなかったように日常に戻る

テキーラとオレンジのわずかな香りだけが残った

(新作)

TURF

この詩をJRAの元騎手・土肥幸広さんへ

土肥さん、呼んでも返事はないね。土肥さんのいるところがあんまり遠すぎて。

騎手免許を取った矢先の落馬事故。

「死んでも同然、マイナスからの騎手人生、なくすものなんて何もないから開き直り、馬に騎乗できたら、あいつは頭がおかしいといわれるほど、非難を浴びました。でも、過去は過去、野武士のように、生き残りました。あなたも本物でしょう。

あなたにしかできないことがきつとあるよ」

土肥さんがいつか私に言った言葉です。土肥さんの言葉があったから、私は何もないとところから這い上がってこられたのに、照れくさくて結局ちゃんとお礼が言えなかった。

少し走っただけで喘息の発作に襲われた子供の頃私にとって、襲歩で駈ける競走馬や騎手は憧れだった。喘息で損ばかりしてきた。詩を書き始めた頃、喘息が再発したんじゃないかと思うほどひどい咳に襲われた。子供の頃、喘息で病院に行つて怖い思いをたくさんしたから、怯えながら病院へ行った。診てくれたのは弓削田晃弘先生という優しい先生だった。「喘息の再発でも痰を出すための咳でもない、

意味のない咳だから我慢して。咳が出そうなのはただの錯覚だよ」と言われた。処方箋に「シャドーロール」って書かれた気がしたよ。臆病で小さな馬ナリタブライアンはシャドーロールをつけて誰よりも強い馬になった。私もブライアンみたいのがむしやらに走って詩人になった。怖いと思うものが前に何も見えなかったから。でも、私はシンザンになるよ。ブライアンは土肥さんと同じで長生きできなかったからね。土肥さんのもういないこの世界で、<sup>ニコニコ</sup>数えきれないほどの勝ち鞍をあげるんだ。私の人生もまた、競馬なのかもしれません。

(新作／「われ、敗れたり」展 出品作品)

## 田口綾子

## ◆『かきくへるま』より

## 水底の雨

君の名を呼ぶことさへも暴力のひとつとかぞへ過ぎゆく雨は

うらがへしあて名を書かば砂となりこぼれてしまひさうな絵はがき

身のうちに魚を棲うをまはせええ、ええ、と頷くたびにゆらしてをりぬ

ごめんねとわれがささやきごめんねと魚がささやきのぼる水泡すいはう

がらすだま昏きひとつをみづくさの陰にかくして顔をあげたり

水底に雨はとどかずやはらかき砂ははづきの暦を描く

みづくさのそやそや揺るる水槽のごときころをたづさへてゆく

さざなみのやがてしづまり水面は温度をもたぬ眼まなこに似たり

雨まじるつめたき風にふうりんのひとつひとつがきらひであつて

かみぶくろに時計をしまひされどまだ失ふものがあるといふこと

## 春雨の象

君はいま泣かねばならぬ 今すぐにレイン・コートを脱がねばならぬ

もうすこしあきらめられぬ便箋に雨といふ字をくりかへし書く

石庭の苔やはらかく雨に濡れ告げてはならぬことひとつあり

あをじろきことばしづめてふる雨に恋はることなき腕をのばせり

てのひらにちひさき水面みなもゆらしつつ数ふる君のつよさとよはさ

あらひたての髪よりあやふきものを恋ふたとへば君の柄のながき傘

ひとどほりすくなきみちをゆくときのあをき傘とはあめのかんむり

みぎの手をそらにかざしてうたふこゑ君はやつぱり晴れをとこゆゑ

まだこゑのきこゆるやうなあまあひのそらにはしろき椅子をたむけぬ

きみは象になつてしまへり春の雨あゆる象になつてしまへり

## 空耳（※一部改稿）

をはりゆく恋などありて春寒の銀のポウルに水をゆらせり

遠く君の声聞くときに心とははがきのごとき大ききしろさ

（空耳だつたならそれでいい）去りぎはの一斉に水鳥のはばたき

音量を落とせる後もPOPが教へる人語と鳥語のちがひ

改札を抜ける人々の泣き顔とコートの色は似ると思へり

犬死には恥、と言はれて階段の上りに顔をあぐるほかなきを

わすれものはそのわすれられしことなどをわすれしのに雲をなすらむ

頬のつめたきはすのひとりさをさがしつづつ蕾のおほき庭を歩めり

## ◆『かぎゆるま』以降

## ながくながく

咲くといふ呪ひのありてつばみより白き花へとくちなしは咲く

白き花も繁るみどりも陽ひのなかに雫らばすなはちをはるいのちを

伝へたきことばもたずこみどりに濃緑のつやつやの葉のうらを覗けり

はなびらのちから失ひゆくまでをながくながく佇たちたりて見はてぬ

こころに差す日傘なければくちなしを思ふこころもさらしつばなし

葉脈のひとすぢひとすぢなぞりゐて逃げ場なければ爪を立てたり

うすれ消えむとする花あらばゆふぐれの奥まで追ひて追ひて捕らへむ

『短歌』二〇一八年一〇月号より

## たつこ

むかし、むかし（わたし、わたしは）あるところに（わたし、わたしが）――

ぬました

みづうみのただいちまいのひろきあを 空のごとくに日々ながめぬき

水ぎははいつも誰かをたたずませ波のしづかに石あらふおと

みづかがみ覗きたるときみづかがみの向かうにありたるわれを望みき

世になくめでたきすがたかたちのをみなといふ全きものを望みぬわれは

祈りつつひとくちのみづ飲みたるにわれのわれを呼ぶこゑを聞きたり

飲むほどに渴きゆくのだ 水をたまへ、水を水みづを水をたまへかしみづを

水に癒されつ戒められつ飲む水のつめたくあつく身に落つる水

水にうつる大きなるかげ 爪も牙もうろこもしづくさせつつ佇てり

龍のかげ水にゆらめきいくたびもいくたびもそれを爪に裂きたり

この牙は何を裂く牙 ふるへをればかちかちと硬くはじきあふおと

濡れをらぬうろこのなくて呪はれぬうろこのなくて陽にきらめけり

世になくめでたきすがたかたちの龍といふ全きものをたまはりぬわれは

呼ぶな、わが名を呼ぶなど叫びしはずのこゑもいなづまのごとく響もしにけり

わが爪はわがおよびよりながくながく伸び果てたれの手ももう取らぬ

身ぬちより痛みはもれて血やみづの混ぢりあふときゆふぐれはきぬ

待ちぬべきものあらざるに待たぬことをやめぬからだを水にしづめて

みづうみが陽を浴びいかにあをくともくらやみとして水底はあり

えいゑんをひとよ一生涯呼ばむ ちぢのあをを重ねつづけてくらき水底

めでたし、めでたし 祈りのやうに響きつつそれは終はりのあるものがたり

『短歌研究』二〇一九年一〇月号より

## 野口る理

薄氷に壊れる強さありにけり

いつぼんの土筆つみてもしやうがなく

ふらここを乗り捨て今日の暮らしかな

春星やポケットにマカロンは駄目

かたつむりみなくなるまでみてやれず

夏座敷招かれたかどうか不安

虹のこと話せば話すほど曖昧

どこにでも架かりて虹の遠きこと

シャワー浴ぶ行く手を阻む者として

青梅ををさめさまよへ拳達

眼光や汗きつぱりとぬぐひてより

処世とは鈍らせること金魚は金

吾のせゐにされたし夏のかなしみは

夜食はベーグル吹くよりも叫びたし

金風やしやがめば近き大樹とも

消えてもう消ゆることなき秋灯

鹿笛と書けば詩境の現るる

船酔やマフラー外すとき空見る

悴めばきつねうどんのやさしさよ

つぶれゆく蜜柑とつぶしゆく蜜柑

しづかなるひとのうばへる歌留多かな

跳びあがることなくスケート終へてお茶

雪ぎゆつと握つてこれはこれで良し

花柄に満ちる架空の歓喜かな

誰も追はずよ雪解川果て目指し

(自作より抄出)



真島久美子

傷口を塞いでしまう修飾語

アンテナの形で人を乞うている

核心にせまる醜く溶けながら

生きてゆくつもり鉛筆噛みながら

泣き虫が全部奪ってゆくのです

言い訳の一つに雪を抱いている

負け犬になれるアナタはかっこいい

生ぬるい雨生ぬるい胸に降る

予防接種のような恋なら済みました

折り紙の白が迷ってばかりいる

ライオンになろうなろうと痩せてゆく

どれくらい憎いか聞いてくる雨だ

アスファルトなんか私咲かないわ

取り外し可能と書いてある背中

形あるものが怖くて裏返す

飛び跳ねる劣等感のその上で

私には無い迷路から出る勇氣

仲間だと思ふ裸足でサンダルで

試着室鏡の奥にある樹海

冷えた指以下同文の中の冬

異次元のバスは私を置いて行く

月までの距離で私を光らせる

縮んだらスタンドバイミーを流す

スキップをしたらピカソの絵になった

口笛でゆっくり消えてゆく火種

クエスチョンマークの下にある酸素

目の前で散っているのは自尊心

直線が生まれるここじゃない何処か

向こう岸ばかりに届く桃である

追伸は人間臭いことを書く

夕陽ってこんなに小さかったかな

軽々と言葉を越えてくる涙

飛べそうな肩甲骨にある記憶

一輪が跳ねて野の花らしくなる